

ヨハネの福音書 第1章 36節

「イエスが歩いて行かれるのを見て、『見よ、神の子羊』と言った。」

見よ、との言葉は注目に値する言葉だ。普段何気なく見ているものがある。見たくて見ているものもある。目を逸らしたくなるものもある。しかし、ここでは「見よ」である。見るべきものを見よ、と促す言葉である。これを見なければことが始まらないということだ。これを見ればすべてが開始する。見る必要があるから「見よ」である。これを見たとき、本当に見るとき、見る者の真の姿が明らかにされ、真に行く道を歩むことになる。しかも、誰もが見る事が出来る道であり、誰にとっても真のこれからが始まる「見よ」である。

イエスが歩いて行かれるの見て、とある。ここで既に見るべきお方のわけがある。イエスのお名前は、主は救いの意味があるからだ。イエスを先に見る者が全世界に「見よ」と叫び注意を喚起する。イエスが先へ先へと進む後ろ姿を見て叫ぶ。

この声に気付いた者は見る。何を見るのか。それは、先に見ている者がイエスと言ったお方の真実な姿である。信じるころで見ると真実である。それが、「神の子羊」である。世の罪を贖うため犠牲となる、神の子羊、御子イエスである。このお方を見る者は救われ、真実の己、道を行く。

2022年7月12日